

鈴木亨君の「實存と労働」を讀んで

島 芳 夫

鈴木君が倫理學の教室に入學したのは昭和十九年頃であつたと記憶する。當時はまさに戦争のさなかで、學徒動員や勤勞奉仕のために研究上最悪のコンディションにあつた。そして戦争が終れば今度は國民經濟がめちやめちやで、皆が食糧買出しに狂奔した時節であつたから、全く悪い時に學生生活を送つたといわねばならない。従つて、落付いて勉強出来なかつたのか、在學中は遂に自身の學力を十分發揮せずにとつたようである。學校を出てからは全然會う機會もなかつたのでどんな方面を勉強しているのか氣になりながらも全く無知のままに過して來た。然るに、今度「實存と労働」を同君から貰つたので半ば好奇心から讀み始めたのだが、その大變な探究力に私は驚いてしまつたのである。何よりも鈴木君の成長を喜び、その精進に深い敬意を表したいと思う。

著者の研究範圍は廣汎であるが、然しその中心テーマは實存哲學と唯物論の對決とその媒介の道の發見である。このテ

マそのものは特別に新しいものでなく、戦後の一種の流行に屬するが、むしろ問題はそのアプローチの仕方である。私が好感を抱くのは、著者がこの、ジャーナリズムの乃至政治的關心に動かされ易いテーマをまじめな學究的良心の問題として誠實に取り組んでいる點である。著者は哲學の過去の巨匠を簡單なレッテルの分類をして倉庫へほうり込んでおくようなことをせず、よくその骨組みと論理を理解することに努めているのは當然のことながら、この當然のことを推さねばならぬ程、若い人々の中には思想のユニフォームを早く着たが傾向が認められる。今の過渡期に政治的關心が薄いことは決して自慢にならないが、然し政治的黨派的關心で學問や教育の問題を處理出來ると考へるようになれば、これは恐るべきことと云わねばならぬ。著者にとつては苦しい道であつたに違いないが、著者が告白する如く「思想は着物のように抜きすてて着かえるという譯にはゆかない」のである。著者の探究心の旺盛さを示すものとして、例えば、第五章「想起・記憶・構想力・推論の圓環的構造」を擧げることが出来る。歴史的時間性的問題であるが、これは同時に物質的發生史的位置付けとも關係する爲に複雑多岐明晰を缺く點が多い。然し着想は確かに面白い。主體的時間と客觀的時間とをもつと明確に分析する所から始めたらよかつたと思う。

そこで著者の根本テーマの研究は勿論多くの問題を残している。又この問題の困難さから云つて當然であつて、著者の不名譽にならない。著者がキェルケゴールとマルクスとは決して單

に對立的でないという確信は尊重されるべきであり、又それを支持する哲學者も多くいる。然し何よりも自分自身の眼でこの問題に立向う必要がある。私の考えでは、この兩者の關係は危機的革命的人間といういさか未分析で曖昧な言葉によつて結びつけられている感じがある。異なる傳統の下に育つて來た思想を、或る情勢の下での共通性の故に綜合するということはややもすれば皮相になり易い。著者の勞働と實存主義との媒介は或る程度成功している。第十章「實存としての所有と勞働」は明快で中々深く切り込んでゐる。然し勞働問題を通して實存概念を展開するやり方——謂わばプロレタリア實存主義——は十分共鳴出来るアプローチであるが、しかし實存概念としての所有は遙かに廣い適用を有することは指摘するまでもない。マルクス主義と基督教的實存主義との綜合の如きは、何れかの立場に大きな變更を加えないでは不可能と思われるが、従つてその結果生れるものは綜合であるよりも、何れかの立場への吸收と思われるが、この困難な問題を取扱つたのが第九章「實存的思惟の展開」である。然しマルクスには無自覺的にせよ信仰の存在する餘地があるとは、その信仰の概念をもつと明かに規定せねば私には理解出来ないことである。

然し著者は若い。この意氣込みと探究力とを以てすれば、更に一層高い成果を擧げ得るだろうことを確信する。

(了)

(筆者 京部大學文學部「倫理學」教授)

次 號 論 文 豫 告

存在論的證明……………

チャールズ・ハーツホーン

——また論破されていない四つの形式——

野田 又夫譯

時と永遠……………

武藤 一雄

——聖書的時間論についての一考察——

カントにおける「直観」……………

観山 雪陽

第九回國際宗教學會議史論について……………有賀熾太郎